

# コミュニティ心理学と自閉児治療教育(Ⅲ)

平 川 忠 敏\*・佐 藤 望\*\*

## 目 次

### 自閉児夏期療育キャンプ11年の歩み

はじめに

#### I 概 要

1. 運営の主体
2. 場所と時期
3. 参加者数と組織
4. 親子分離

#### II 目 的

1. 自閉児のグループ
2. 親, 兄弟のグループ
3. 現場の担任のグループ
4. トレーナーのグループ
5. 一般地域住民

#### III プログラム

〈自閉児関係〉

1. Tr のオリエンテーション
2. ミーティング (Tr)
3. 入 浴 (全員)
4. 食 事 (全員)
5. 夜間早朝託児所 (本部スタッフ)
6. 結団式 (全員)
7. 野営の準備 (年長自閉児)
8. 水 泳 (自閉児, 兄弟)
9. 納涼大会 (自閉児, 兄弟)

10. 登 山 (自閉児, 兄弟)

11. 演芸大会 (自閉児)

12. オリエンテーリング (年少自閉児, 兄弟)

13. キャンプファイヤー (自閉児)

14. 創作活動 (年長自閉児)

15. 運動会 (全員)

16. 討論会 (兄弟)

〈親, 研修生〉

1. オリエンテーション, 自己紹介

2. 集団討議, 個別相談

3. 講 義

4. 自由時間 (親)

5. ケース研究会と討論会 (研修生)

6. 解団式 (全員)

#### IV キャンプの効果

1. 自 閉 児

1) 生活習慣, 食事

2) 対人接触

3) 情緒の安定

4) こ と ば

5) 行動の統制, 自律心

2. その他の人々

3. before effects

---

※ 鹿児島大学教養部心理学研究室

※※ 鹿児島県立短期大学心理学研究室

#### V 要 約

# 自閉児夏期療育キャンプ11年の歩み

平 川 忠 敏・佐 藤 望

## はじめに

自閉児を対象に夏期療育キャンプをはじめてすでに11年が経過した。この11年の間に、自閉児への療育に対するわれわれの態度は大きく変わってきた。はじめの頃の療育は、遊戯療法や行動療法による自閉児へのアプローチと親のカウンセリングを中心としたものであり、従来の臨床心理学的方法であった。しかし、最近では、自閉児や親はもちろんのこと、学級担任や兄弟あるいは一般の地域住民も療育の対象に考えている。すなわち、自閉児と彼を取り巻くすべての人を療育の対象にしたコミュニティ心理学的立場からのアプローチへと変わってきている。

本論は、第1に最近行われたキャンプの内容を具体的に紹介し、キャンプのマニュアルとして役立つことをねらっている。第2に、このキャンプをコミュニティ心理学的に考察することで「地域ぐるみの障害児教育のあり方」をさぐることを目的としている。

## I. 概 要

### 1. 運営の主体

われわれは、毎月第2日曜日に「自閉児集団療育日曜学級（以下日曜学級と略す）」を、実施してきている（佐藤他1977、平川他1978）。そこには約80名の自閉児と約100名のボランティアが集ってくる。このボランティアのことをわれわれはトレーナー（以下Tr.と略す）と呼んでいる。鹿児島県では現在のところ約150名の自閉児が各機関でリストアップされている。従って、その半数がこの日曜学級へ通っていることになる。

この運営は、ボランティアグループである日曜学級運営委員会が行っている。そのメンバーは、親代表、心理学関係者、教諭、保母、学生Tr.のリーダーなど約15名からなる。いわば、日曜学級のブレインであり、本部スタッフとわれわれは呼んでいる。

キャンプは、日曜学級の8月の行事であり運営は上記の本部スタッフが主となって行う。運営に関する費用は参加する親が負担している。ちなみに、昭和55年度のキャンプでは、自閉児と母親と兄弟1人の合計3人が参加した場合16,570円の負担金であった。

### 2. 場所と時期

キャンプは、これまで10年間は2泊3日で行われてきて、11年目から3泊4日になった。場所は、霧島高原の一角にある県立青年の家である。11年間も同じ場所で開催しているのは立地条件のよさが最大の理由である。

グラウンドをはさんで独立した宿泊棟が2つある。一方は、親、兄弟、研修生が宿泊する。他方は、研修館と呼ばれ、年少自閉児が担当Tr.と宿泊する。研修館に隣接して体育館が

ある。ここから10分位離れた小高い丘にはテント村があり年長自閉児が担当Tr.と宿泊する。宿舎から霧島連山の登山口までは、車で30分の距離である。近くの小学校のプールを借りて水泳もできる。また、国民休暇村の広い児童公園や牧場も宿舎に隣接している。このような立地条件のよさが多様なプログラム立案の基礎となっている。

### 3. 参加者数と組織

これまでのキャンプの参加者は表1の通りである。自閉児1人につき、家族、Tr.、本部スタッフなど平均4人が加算されると考えればよい。収容人員の関係で自閉児55人が最大のところである。55年度は、教諭、保母、施設職員を対象に研修講座をはじめて開いた。

表1 キャンプ参加者の経過

年 度	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55
自閉児	7	12	13	17	16	23	24	37	34	44	55
Tr. スタッフ	18	24	24	24	30	28	29	50	51	57	79
家 族	13	20	23	25	32	40	39	58	63	67	82
研修生											16
合 計	38	56	60	66	78	91	92	145	148	168	232

また、テント村に宿泊するグループを設けたのも3泊4日間にしたのも55年度からである。これまでは2泊3日間であった。

キャンプの組織は図1の通りである。目的のところで詳しく述べるが、年長自閉児とTr.、年少自閉児とTr.、親、兄弟、研修生のグループに分れている。各グループとも本部スタッフがリーダーとなりそれぞれ独立して機能している。自閉児のグループは、発達段階や年齢によって8～10名からなる6つの小グループに分けられ、それぞれ動物の名前がつけられている。テント村では、約50人分の食事を準備しなければならず、3名の炊事専従班がいて自炊の援助をしている。但し、自炊は自閉児には無理で、親が交替でつくっている。

キャンプ長がこれらの組織を統括している。医療班は、保健婦が救急係として常駐している。医者は常駐していないが、近くにある鹿児島大学医学部附属病院霧島分院と連絡がすぐとれるように手配してある。

### 4. 親子分離

キャンプ期間中は親子分離が原則である。自閉児は、結団式のあと親と離れ最終日の運動会の時再会するまでTr.と1対1で過ごす。自閉児の毎日の様子は每晚グループリーダーが代表で親に連絡に行く。

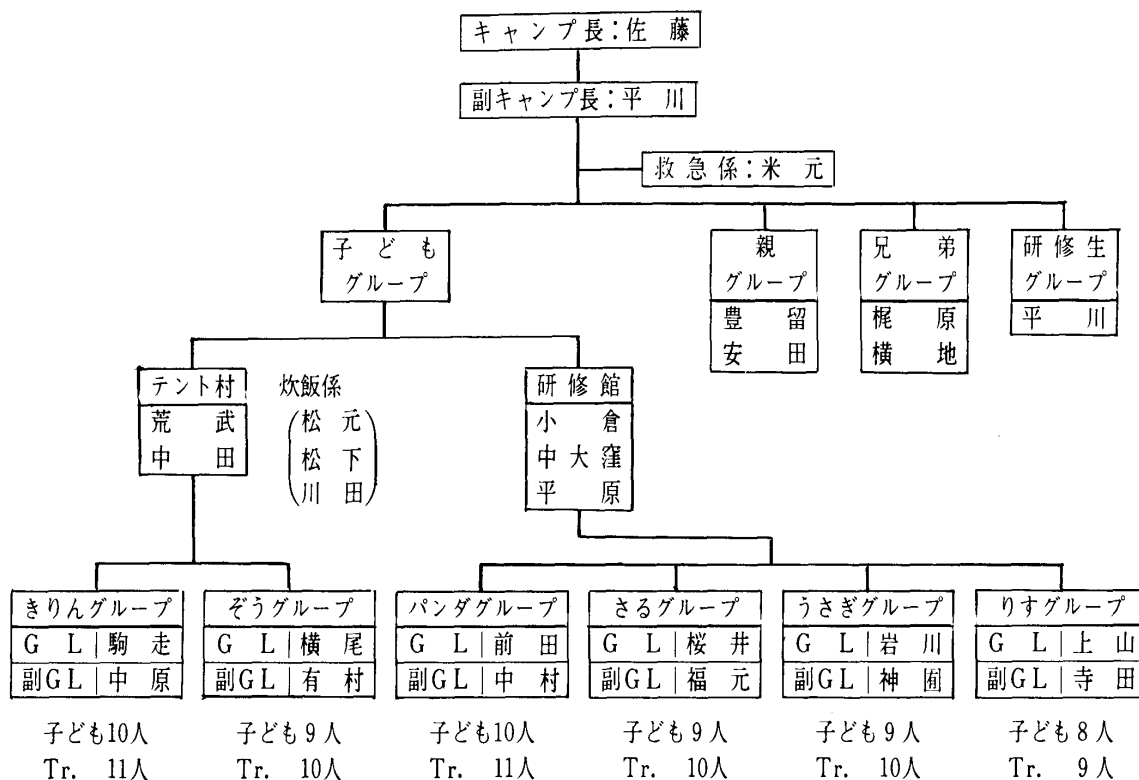


図1 キャンプの組織

## Ⅱ 目 的

自閉児だけでなく、彼らを取り巻くあらゆる人が変化し発達していかなければならない。そこでキャンプは、単に自閉児だけでなくすべての人にアプローチするように多角的に運営されている。日曜学級を構成しているメンバーを大きく次の5グループに分類し、この5グループに対する多目的なキャンプを企画運営している。

- (1) 自閉児のグループ
- (2) 親、兄弟のグループ
- (3) 教諭、保母などの担任のグループ
- (4) Tr. のグループ
- (5) 一般地域住民

この5グループに対するキャンプの目的はそれぞれ次の通りである。

### 1. 自閉児のグループ

キャンプが自閉児の行動の改善、あるいは行動の形成を第1の目的としていることはもちろんである。集団行動と自由時間の両方をプログラムに組み、Tr. や友だちとの遊びや生活を通して少しでも自律的、自発的行動を引き出し、キャンプが発達の契機となることを目的としている。

## 2. 親、兄弟のグループ

親に対するキャンプの目的は次の3つにまとめられる。

1. 自閉児にとってよい親であるための研修の場。
2. 自閉児から解放された安息日。
3. 親同士の交流を深める場。

これらの目的を達成するために、講義、集団討議、レクレーション、自由時間などと多様なプログラムを組んである。

兄弟にもキャンプへの参加を奨励している。そして、年長自閉児のプログラムに準じて活動する。最も重点を置いているのは、兄弟である自閉児の障害についての話し合いである。兄弟の目的は次の3つにまとめられる。

1. 障害を正しく把握すること。
2. 自閉児の問題行動に適切に対処する能力を身につけること。
3. 兄弟が自閉児であるために生じるクライシスを乗り越えていく資質を身につけること。

## 3. 現場の担任のグループ

家族の次に自閉児といつもよく接している人は、学校、幼稚園、保育園あるいは施設などの現場の担任である。従って、現場の担任がよき療育者になることが自閉児のよりよい発達をもたらすといえる。

また、自閉児を担当したことで何らかのクライシスが生じた時、一人でかかえこむのではなく、社会資源を十分活用できるように訓練を積むことが必要である。これらのことを目的に、講義や親との話し合い、また、現場で担当している自閉児のケース研究会からなる研修講座を準備している。

研修講座への勧誘は、親が直接自分の子どもの担任に話す方法と各機関へ文書連絡する方法をとっている。

## 4. トレーナーのグループ

原則として毎月の日曜学級で担当している自閉児をキャンプでも担当する。毎月の日曜学級は2時間であるが、キャンプは3泊4日間自閉児と起居を共にする。Tr. にとっては資質向上の絶好の機会である。それに、自閉児との関係も十分につけることができるので、今後の療育活動がより効果的なものになることが予想される。

## 5. 一般地域住民

「地域ぐるみの障害児教育」を進めていく上で、重要な役割りをになうのは一般の人たちである。日曜学級やキャンプでは、直接的にこれらの人々に働きかけてはいない。しか

し、報道機関によるキャンプの紹介を通して間接的に働きかけている。一般の人々が自閉児やその他の障害児への関心を高め、正しく理解することで自閉児の環境はかなり改善される。直接的な関係者だけの資質の向上にとどまらず、その他の人々をいかに巻きこんでいくかを常に考慮しておくべきであろう。

### Ⅲ プログラム

それぞれのグループごとの目的を達成するために、本部スタッフはキャンプの3か月前から毎週一回の割で打ち合わせに入る。

プログラム決定は次のような要領で行われる。まず、水泳とかキャンプファイヤーなどと大枠を決める。例えば、本部スタッフの一人が水泳の責任者になり詳細な内容を考えてくる。それを全員で検討する。一回の検討でプログラムの内容がパスすることはまずない。何回か検討が加えられ詳細なプログラムが決まる。あとは教材の製作や調達をして準備を終わる。

プログラムの詳細な内容は、キャンプの実施要領といっしょに冊子としてまとめられ、親、Tr.、研修生など参加者全員に配られる。

表2は、55年度のキャンプのプログラムである。Tr.は自閉児とまったく同じスケジュールなのでTr.の項目は設けてない。表をみると、ずい分ハードスケジュールにみえるが、プログラムとプログラムの間には、十分な時間の余裕をみてある。従って、自由時間は結構多くとれるのである。

以下、主なプログラムの詳細な内容について報告していく。

#### 〈自閉児関係〉

##### 1. Tr.のオリエンテーション

Tr.は毎月の日曜学級に継続的に参加している人が多く、そういう意味では日頃から訓練を積んでいる人たちである。キャンプ期間中の基本的態度やプログラムの内容紹介についての詳細な打ち合わせは、キャンプ前日に半日かけて行っている。自閉児と共に生活するTr.の動きこそがキャンプの成功、不成功を決定するといっても過言ではない。従って、キャンプの要領やプログラムをとじた冊子を配り、かなり綿密な打ち合わせをする。

全般的なことについてのオリエンテーションが終了したあと、各グループごとの話し合いに移る。キャンプファイヤーなどでのグループの出し物を決めるのである。このグループごとの話し合いは、グループリーダーとサブグループリーダーを中心に10人前後で行われるが、モラルが高まり目的達成にとって効果的会合になっている。

プログラムにある一日目のオリエンテーションというのは、青年の家を使用するにあたってのものである。

表2 昭和55年度日曜学級夏季療育キャンププログラム

8月22日(金)						8月23日(土)						8月24日(日)						8月25日(月)																				
年長 自閉児	年少 自閉児	兄弟	親	研修生		年長 自閉児	年少 自閉児	兄弟	親	研修生		年長 自閉児	年少 自閉児	兄弟	親	研修生		年長 自閉児	年少 自閉児	兄弟	親	研修生																
						起床・朝のつどい・清掃						起床・朝のつどい・清掃						起床・朝のつどい・清掃																				
						朝食	朝食	朝 食				朝食	朝食	朝 食				朝食	朝食	朝 食																		
						登山 (大浪池) ↓えびの高原	登山 (大浪池)	登山 (大浪池) ↓えびの高原	講義 (楠)			水 泳	オリエン テーリング	講義 (平川 佐藤)				運 動 会																				
Tr.オリエンテーション																																						
受 付・昼 食																							昼 食	昼食	昼食	昼食	昼 食	親とのミーティング										
結団式・集団遊戯																							講 義 (吉田)	創作 活動	洗濯 ごっこ ヘイン テー ン グ	自由 時間	ケース 研究会と 討論会	清 掃 解団式 (ダンス・講話)										
野営の 準備	水	泳	・オリエン テーション ・自己紹介																					人形劇	夕食	夕食	夕食	夕食	討論会	ケ ー ス 研 究 会 と 討 論 会	14:30 ↓ 15:30							
	自由	自 由																														夕食	夕食	夕食	夕食	討論会	Tr. ミーティング (体育館)	
入 浴		夕食	夕食	夕食	夕食	入 浴																	入 浴	入 浴	入 浴	入 浴	入 浴	入 浴	入 浴	入 浴	入 浴	入 浴	入 浴	入 浴	入 浴	入 浴		入 浴
納涼大会						野外 映写 会																	えん げい 大会	キャンプ ファイヤー	集 団 討 議	キャンプ ファイヤー		個人 相談	集 団 討 議	キャン プ フ ァ イ ヤー								
就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝																	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝
Tr. ミーティング		集団討議				Tr. ミーティング																	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝
就 寝						就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝	就 寝																

## 2. ミーティング (Tr.)

Tr. は自閉児が就寝したあと、各グループごとにミーティングをする。どんなに対処し  
てよいかわからなかったこととか、健康状態などが話題になる。グループリーダーで対処  
しきれない問題は本部スタッフのところまで持ちこまれるようになっている。

グループリーダーは、ミーティングで得た自閉児各人の情報を親のところへ報告に行く。

## 3. 入 浴 (全員)

キャンプへの参加者が少ない頃は、入浴は有益なる療育の時間であった。しかし、最近

では参加者が多くなり、しかも限られた時間内に入浴をすませなくてはならないので療育的意味は薄れてきている。Tr. は、自閉児を入浴させるTr. と入浴をすませた子をふいてやったり着せてやるTr. の2組に分かれている。

#### 4. 食 事 (全員)

テント村の年長自閉児は、親がつくった食事を広場にシートを敷いて食事をする。食後の食器を洗い場まで持っていくことだけは自閉児自身にさせている。年少自閉児の食事は、青年の家が準備してくれる。食事は格好の療育である。拒食や偏食のひどい自閉児には、ベテランのTr. をつけている。そういう子に対し、Tr. はおやつをやって妥協したりせずに徹底的に指導する。もちろん、健康管理には十分留意している。3泊4日と長期間なので、はじめ頑固に拒食、偏食していた自閉児も最後は食べるようになることが大いに期待される。

#### 5. 夜間早朝託児所 (本部スタッフ)

これは、隠れたプログラムである。とくに1日目の夜、年少自閉児のなかになかなか眠らない子どもがでてくる。年少自閉児の場合、部屋に5人の自閉児と5人のTr. が寝ている。いつまでも騒いでいる子がいると他の人に迷惑になる。そこでどうしても眠らない子、あるいはあまりに早く目覚めた子は託児所へ連れてくるようにしている。時間は、夜11時から朝6時までである。こうしないと自閉児はもとより担当のTr. が疲労してしまうからである。託児所は年少児の宿舎に隣接する体育館であり、そこに本部スタッフが2人仮眠している。担当Tr. は自閉児を預けたら宿舎に帰って眠る。

テント村の年長自閉児にはこのような配慮は必要ない。年少自閉児も？日目からは利用者がほとんどいなくなるほどである。

#### 6. 結 団 式 (全員)

現地の体育館で行われる開会式である。自閉児と担当Tr. それに家族が各グループごとに整列する。簡単な儀式があり、続いてグループ内での自己紹介に移る。とくに、家族とTr. の間で自閉児についての情報交換が行われる。それらがすんだあと、集団遊戯を行いそれぞれの宿舎に引きあげる。ここで親子分離をしたら4日目の朝までお互いに会えないのである。親子の分離が困難な自閉児がいるが、原則としては強制的にでも引き離すことにしている。集団遊戯の一連の動きのなかで、親子を分離するようにすれば比較的問題は少ない。

#### 7. 野営の準備 (年長自閉児)

テント村で過ごす年長自閉児は、自閉児3名、Tr. 3名の計6名でひとつのテントに入



る。野営や食事の準備に入るが、大半の自閉児にとって困難を伴う仕事である。食事は、2日目の午後、登山から帰ってきたあと、失敗しても可能な範囲で作るのみである。いつもの食事は、炊事専従班の指示のもとで親が当番でつくる。

この時間の年長自閉児は、トイレや水道の確認など、テント村周辺の探索行動が主となる。

## 8. 水 泳（自閉児，兄弟）

水泳は近くの小学校のプールを借りて行っている。各感覚器官の統合の障害であるともいわれている自閉児にとって、水泳は格好の種目である。年少児は、水遊びあるいは水の中での集団遊戯を中心にプログラムを組んでいる。水の中での「ハメハメハ大王」や「マイムマイム」などなかなかおもしろいものである。また、グループごとのボートレースなどもやっている。

年長自閉児の水泳は、泳ぐことを中心に考えている。手と足と頭を協応的に動かすことはかなり困難であるが、身体的適応の訓練として水泳に優るものはないように思っている。

## 9. 納涼大会（自閉児，兄弟）

自閉児のほとんどと本部スタッフの数人は浴衣を着て夏祭りの気分を盛りあげる。全員に団扇も配る。

内容は、おみこし、相撲大会、のど自慢大会、夜店コーナー、花火大会、盆踊りと多様である。自閉児たちは、まず、おみこしをかついで広場を回り、そのまま相撲会場に移動する。そこでは行司の衣裳を身につけたTr. がいて大相撲よろしくやっている。

納涼大会のメインイベントは、のど自慢大会である。朝礼台の四隅に長い竹をとりつけ裸電球をぶらさげる。歌い手用と司会者用のマイクを用意する。それに、合格を知らせる鐘も準備する。浴衣に下駄ばきの女性Tr. が司会をする。舞台の前にはTr. と自閉児が座っており、舞台の後方も順番待ちの自閉児や兄弟でいっぱいである。日頃あまり話しのできない自閉児が当世流行の歌を歌う。文部省唱歌を歌うのは兄弟である。

のど自慢が一段落したら、夜店コーナーへ移る。ビニールプールの中には風船や、ハップスチロールでつくった金魚が浮かんでいて、風船つりや金魚すくいができる。七夕も準備してあり、Tr. が思い思いのことを短冊に書いてかざりつける。時々、大きな花火が打ちあげられるし、希望者は小さな花火で楽しめる。

納涼大会のフィナーレは盆踊りである。のど自慢の舞台を囲み、鹿児島おはら節やどらえもん音頭を踊って終わるのである。

## 10. 登 山（自閉児，兄弟）

年少児は片道60分、年長児は片道90分ぐらいかかる山に登る。このプログラムに約半日

費やしているが、山道を黙々と歩くことは自律心を養うことに効果的と思われる。

### 11. 演芸大会（自閉児）

体育館で夜行われる。人形劇があり、その後は好きなコーナーで遊ぶようになっている。各コーナーは、影絵、絵日記、共同絵画、絵本、粘土のコーナーからなっている。

### 12. オリエンテーリング（年少自閉児、兄弟）

青年の家周辺では、オリエンテーリングの大きな大会が行われるような設備がある。前日までに地図をTr. に渡しておく。そして自閉児の能力と時間から目標数を設定してそれだけしか回らないようにする。時間やチェックポイント数にあまりこだわらず、草花や風景に目を向け、何か新しい発見ができたらと思っている。但し、自閉児とTr. が一対一で出かけるので事故の防止に留意すべきである。われわれは要所に本部スタッフを配置し事故防止もしくは早急の対処に備えている。

### 13. キャンプファイヤー（自閉児）

最後の夜はキャンプファイヤーである。キャンプファイヤーは納涼大会と同じくキャンプのメインイベントのひとつである。夜は自閉児を見失う危険性があるが、それでも夜のプログラムの方が集団としての凝集性が高いようである。それは、周囲が暗く当面の舞台だけが照らし出されているからかもしれない。

キャンプファイヤーは、前後の儀式をはさみ各グループごとの出し物やとび入りがある。厳粛さと楽しさの両方を兼ね備えた種目は他に見当たらない。

暗闇にまぎれて見ていた親から「あんなに楽しいものなら、われわれにもさせてほしい」という意見が出て、親は別の日に行くようになった。

### 14. 創作活動（年長自閉児）

今回は、木陰で彫刻刀を用いてひとりひとり版画を彫り、長い棒に打ちつけてトーテムポールを作った。また、共同製作で日曜学級の団旗をつくった。このように手先を使う仕事をさせることも療育的意義がある。

### 15. 運動会（全員）

運動会の始まる前に、親はグループごとにグラウンドに整列する。自閉児とTr. は約 100メートル離れたところから親のところへ走っていく。3日ぶりの感激の対面である。自閉児よりも親やTr. が泣き出してしまう。

運動会は自閉児、親、Tr. の三人一組で行われる。かけっこ、騎馬戦、障害物競争など盛りだくさんの種目が準備されている。運動会もキャンプのメインイベントのひとつであ

る。

## 16. 討 論 会（兄弟）

「兄弟の障害」について率直に話し合いながら、障害を正しくとらえていけるようにする。「ぼくは、弟はあんまりわがままだから嫌いだ」という兄や姉も少なくない。何故わがままなのか、どう対処すべきなのか、子ども同士で話し合いをさせる。あるいは友だちに自閉児の弟のことを何と伝えたらよいのかなどといったことを話し合う。

### 〈親、研修生〉

#### 1. オリエンテーション、自己紹介

キャンプの趣旨、プログラムの説明、青年の家の使用規定などについてのオリエンテーションがある。その後、親睦を深めるためのゲームや自己紹介をする。

#### 2. 集団討議、個別相談

夜は、就学相談とか就職相談のように問題別に3つか4つのグループに分け討議をする。あるいは、本部スタッフや先輩の親や講師の先生と十分時間をかけて個別に相談する。

#### 3. 講 義

講義は外部講師の場合1時間半話してもらい、残り1時間半を質疑応答にしている。しかもなるべく宿泊してもらうので親は十分に話すことができる。55年度の講師は、次の通りであった。

##### 外部講師

楠 峯 光先生（福岡市中心身障害福祉センター）

「自閉児の言語発達」と療育相談

吉 田 光 顕先生（鹿児島県立武岡台養護学校）

「養護学校における自閉児の教育」と療育相談

##### 内部講師

佐 藤 望（鹿児島県立短期大学）

「自閉児の学習療法」

平 川 忠 敏（鹿児島大学教養部）

「障害児と地域社会」

#### 4. 自由時間（親）

昼寝をしてもよいし、温泉に入りについてもよいまったく自由に過ごしてよい時間である。のんびりテレビをみる人やソフトボールをする人が多いようである。

#### 5. ケース研究会と討論会（研修生）

日頃現場でかかえこんで困っている問題を出してもらいみんなで検討したり、講師の意見を聞いたりする。あるいは、キャンプに対する感想を述べあう。

#### 6. 解 団 式（全員）

すべてのプログラムを完了し、残るは、解団式のみである。これが済むと、Tr. がアーチをつくりそのなかを親と自閉児がくぐり抜けて帰宅の途につく。その後、Tr. は最後の反省会を時間をかけて十分に作る。

### Ⅳ キャンプの効果

#### 1. 自 閉 児

自閉児に関するキャンプの効果を親へのアンケート調査の結果をもとに検討してみる。キャンプ終了約一ヶ月後の第47回日曜学級（55年9月21日実施）の際、今後のキャンプ運営についての検討資料とするため親へ総合的アンケート調査を実施した。このアンケート項目中「キャンプに参加して子どもさんに変化がみられた点」についての自由記述式回答を分析集約して検討してみる。

記述内容は、キャンプ終了後約一ヶ月の間に回答者すべての子どもに親から観察する何らかの変化が認められ、これらの変化は親の主観的評価ではあるが、かなり確かに印象的に感得している変化で、従ってこれらはキャンプを契機とする子どもの発達変容と認めることができると考える。本キャンプは昨年までは2泊3日であり、本年より3泊4日親と離れて生活するのであるが、毎年参加している親の観察として、本年は特にキャンプ後の変化が顕著であることの実感が強い。

近時、各地で自閉児の療育キャンプが実施されるようになったが、その成果として基本的生活習慣、食事等の行動改善が多く報告されている。本キャンプにおいても幼児についてこの改善が記述されているが、多くは自閉性障害の基本的障害に係る改善、全人格的発達についての変化に眼が向けられている。このことは本キャンプが毎月開催の集団療育「日曜学級」の延長上の療育として位置づけているため、親の観点が細かい面よりも、より基本的な発達変容に関心が向けられているためであろう。

キャンプ参加児55名中、アンケート回答者31名を、未就学児を幼児群（14名）と就学児を学童群（17名）とに分け、回答内容を5つの項目に分類したのが表3である。回答は自由記述形式であるので、各人がその中で最も強調している変化内容を1～2取り上げ、そ

表3 キャンプ一ヶ月後までにみられた発達的变化

項 目	幼 児 群 14	学 童 群 17	計 31
1. 生活習慣・食事			
(1) 生活リズムが規則正しくなる	1		
(2) 早寝、早起の習慣がつく、寝つきがよくなる	2		
(3) 衣服の着脱が自立し、早く正しくなる	2		
(4) 食事量が増える	1		
(5) 偏食が少くなる	1		
	7 (50.0)		7 (22.6)
2. 対人接触			
(1) 親に甘え、ベタベタつくようになる	2		
(2) 目が合うようになる	1		
(3) 兄弟と遊べるようになる		1	
(4) 友達との接触が増える	3	1	
(5) 幼稚園で集団で遊戯するようになる	1		
(6) 他児に反抗するようになる		1	
	7 (50.0)	3 (17.6)	10 (32.2)
3. 情緒の安定			
(1) 表情が明るくなる	2	1	
(2) 落ち着いてくる		2	
(3) 素直になる		1	
(4) よく歌うようになる	1	1	
(5) 一まわり大きく、たくましくなる		2	
	3 (21.4)	7 (41.2)	10 (32.2)
4. こ と ば			
(1) ことばを発するようになる	2		
(2) ことばが増える	3	4	
(3) 指示が判るようになる	3		
(4) 言語指示に従えるようになる	2		
	10 (71.4)	4 (23.5)	14 (45.2)
5. 行動の統制, 自律心			
(1) 手を離して歩けるようになる	2		
(2) 外出しても親を意識するようになる	1		
(3) 行動範囲が広がる	1	1	
(4) 勝手に遠出しなくなる	1		
(5) 留守番ができるようになる	1		
(6) 同ー行動が少くなり行動に変化が出る		1	
(7) 規則が守れるようになる		2	
(8) 学校で授業中教室にいられるようになる		2	
(9) 自立心が増え自主的になる	1	2	
	7 (50.0)	8 (47.0)	15 (48.4)

( )は各群計に対する%

れぞれの項目の具体的内容とした。以下項目ごとに検討してみる。

### 1) 生活習慣, 食事

キャンプは4日間起床から就寝まで規則正しい日課で編成されている。この間一人の担当トレーナーが親替わりとして四六時中自閉児と行動を共にする。そして自分のことはできるだけ自ら行動するよう援助し訓練する。家庭においては、自閉児はやらないものとしてつい親が先に準備し手を貸してしまうことが多い。従って数日間親から離れ、他人の中で生活することにより、まず具体的行動変容としてこの生活習慣の改善が上げられることが多い。本キャンプにおいても参加児の大部分にこの変化はみられているが、特に幼児群で、早起、早寝の習慣形成、衣服着脱の改善、食事量の増大、偏食の矯正等を最も大きな変化としてあげた者は7名(50.0%)である。

### 2) 対人接触

対人接触、他児へのかかわりの困難さは確かに自閉性障害の主要症候の一つである。しかし対人的コンタクトは自閉性症候の中で最も発達改善しやすい面であり、学童群では既にかかなりの対人的疎通性の形成されている者が多い。しかし特に3才~4才の幼児群は未だ身体図式の認知も不全で、母親の存在意識も稀薄である。これらの子どもは数日間母親から全く離れることにより母親への意識が形成されはじめ、母親に甘え、分離不安が起ることは屢々経験する。今回も2名ある。幼児群でも友達との接触が増え(3名)、幼稚園で急速に皆と一緒に遊戯に入れるようになった者がいる。学童群の他児に反抗するようになった変化も社会的認知の発達的变化と考えてよいであろう。

### 3) 情緒の安定

自閉性幼児は全般に極めて多動で、自己の欲求のままに行動し、行動指示や強制に対して情緒的コントロールを乱す場合が多い。この症候は自閉性幼児のかなり基本的特徴で短期日のキャンプ経験で急速に情緒的コントロールが形成されはじめることはむづかしい。従って幼児群では表情が明るくなった、よく歌うようになった、の3名(21.4%)に変化がみられた。それに対し学童群では親から離れ広大な自然環境の中で自己を開放し、楽しく集団生活をする経験により、かなり確かな情緒的安定が得られ、落ち着いてきた、素直になった、一まわり大きくなった、たくましくなった、との親の実感的変化が7名(41.1%)にのぼる。

### 4) ことば

言語の発達障害は自閉性障害の最も基本的症候である。つとにKanner, L. が指摘しているように5才までに言語発達が進むか否かは予後に大きなかかわりをもつ。従って、幼児期に発語が現れるような療育を考えていかねばならない。この療育キャンプは本アンケート調査結果からは、ことばの発達について最も大きな効果が示された。特に幼児群の14名中10名(71.4%)にことばの発達的变化がみられたことは特筆すべき結果と考える。言語発達は大きく分けて受容言語と表出言語からなるが、キャンプを契機に受容言語の形成が

はじまるもの、表出言語が出はじめ豊かになるものがある。学童群でも4名がことばが増えはじめる契機となっている。

自閉児の言語発達は今日、自閉症研究の中心的課題となっているが、単に幼児期からのオペラント的言語訓練により象徴機能としての言語、概念が形成されるものとは考えられず、生活全般を通じての経験により統合機能の一定水準への発達が基礎になると考えられる。その契機としてキャンプの規律的集団生活経験は重要なものと考えてよいであろう。

### 5) 行動の統制、自律心

行動が単なる多動的、衝動的行動でなく、自律的な目的的行動に変容させていくことも療育の大きな目標である。この点についても幼児群、学童群共に約半数の者が何らかの顕著な変化を示している。幼児群では外出の時、手をしっかりつないでいないと何処へ行くか判らなかったのが手を離してもついて来る。自発的に母親の洋服を握っている。離れて歩いていても常に親を意識しているようになる。また家をとび出せば必ず警察のお世話になっていたのが、キャンプ後遠出しなくなる、一定時間すれば帰宅する等の変化が現れてきている（7名、50.0%）。学童群では学校で教室を勝手に飛び出さず、授業時間入室できるようになる。学校の規則を守るようになる等の変化と共に（8名、47.0%）、(3)項の情緒の安定と関連して自立心が増進し、自主的となる、一まわりスケールが大きくなった等の全人格的発達を実感する親が多い。

## 2. その他の人々

多様な目的にそって、対象にしたすべてのグループを評価していくべきなのであるが客観的データをとっているのは自閉児についてのみである。そこでここでは自閉児以外のグループについて主観的になるが簡単にキャンプの効果を考えてみたい。

どのグループも3泊4日間の集中的集団心理療法を受けたと考えられ、質的転換を示す人が多くみられた。とくに、親は顕著な変化を示した人が多かった。

今回は、テント村の食事当番を親にしてもらったがこの作業が親同士の連帯を生みだすのにもっとも効果的だったように思う。キャンプを運営していく上で重要な仕事に共同で助勢してもらおう。このことがキャンプへの親の意気込みをより強いものにするといえよう。

キャンプから帰ってすぐに「父親の会」が発足したのもキャンプが親にもたらした効果を現わしている。

Tr. は3泊4日という期間を自閉児と暮らしたことでスケールアップしたことはいうまでもない。他の人々もこのキャンプを通して大きな質的転換を迎えたにちがいない。

今後は、親や兄弟やTr. などそれぞれの障害児に対する理解の程度をキャンプの前後に測定するようにしていかななくてはならない。

### 3. before effects

after effects にのみ視点がいきがちであるが、忘れてならないのはbefore effects である。キャンプまでにおしっこを教えるようになっておこうとかキャンプまでに一人で靴をはけるようになっておこうあるいは衣服の着脱は一人でできるようになっておこうとして親は努力しその効果が現れる。このようなbefore effects の存在も忘れてはならない。そのためには、本部スタッフだけが3か月も前から動き出すのではなく、日曜学級のすべてのメンバーに早くから「3泊4日のキャンプ」を宣伝しておくことが重要になってくる。

## V 要 約

これまでの報告を要約すると次のようになる。

1) われわれが行ってきたキャンプの内容を紹介してきた。自閉児と彼をとり巻くすべての人へアプローチしようとして多目的なプログラムを組んでいるのが特徴といえよう。しかし、自閉児以外を評価していないという問題点が残った。また、人的環境の調整だけでなく物理的環境あるいは福祉手当などについてもアプローチしていくべきである。

2) 3泊4日間は長すぎるのではないかという心配があったが杞憂に終わった。もう少し長くてもよいという意見も出たほどである。3泊4日間集中的に集団心理療法を受けているも同じことで質的転換を遂げた人が多かった。親は参加しなくてよいキャンプがあるが、それはやはり片手落ちと思われる。

3) 多様なプログラムを組むことにより大きな発達が望まれる。お祭りの要素と訓練の要素がかみ合う時がもっとも効果的と思われる。

4) 親子分離は、自閉児に自律心を育てしかも少々の変な癖は矯正されてしまうということがみられた。

5) あらゆる人々が主体的に参加するためには、食事当番にみられたように、重要な仕事にタッチしているという意識を一人一人が持てるような役割りを与えることである。

6) after effects のみに注目しないで、before effects にも注目すべきである。

7) 約15名の本部スタッフに代表されるように、ブレーンが多いことはこのような多目的なキャンプを運営するには必須不可欠である。

## 参 考 文 献

- 安藤延男編, 1979, コミュニティ心理学への道, 新曜社。  
平井信義, 1980, 子どもの自由な七日間, 新曜社。  
平川忠敏他, 1978, コミュニティ心理学と自閉児治療教育(Ⅱ), 鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報第7報, 17-43。  
小林隆児・村田豊久, 1977, 自閉症児療育キャンプの効果に関する一考察, 児童精神医学とその近接領域 18, 4, 221-234。  
佐藤 望他, 1977, コミュニティ心理学と自閉児治療教育, 鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報第6報, 9-34。